

# の み が わ

2007年5月7日発行(通算第45号)

連絡先 〒146-0085 大田区久が原4-19-24

発行 大坪庄吾方 呑川の会

呑川の会 e-mail [s.ootubo@nifty.com](mailto:s.ootubo@nifty.com)

呑川の会 HP <http://homepage3.nifty.com/nomi/>

高橋会 HP <http://homepage2.nifty.com/aoiyume/>



## 第1回 呑川シンポジウムに多数の参加を

5月19日(日) 大田区生活センター 講座室(2階)

前号でのご紹介した第1回呑川シンポジウムの内容が下記のとおり固まりました。下水道局、あるいは大田区に被害の実態を知ってもらうことは悪臭等を解決する第一歩であり、この問題に対する住民の関心の高さを示す必要があります。そのためにはこのシンポジウムに多数の参加者が集まることが重要でもあり、大勢の参加をお待ちいたします。(チラシ参照ください)

**開催日時** 5月19日(土)13時開場 13時30分開始 16時終了  
**会場** 区立生活センター 講座室(2F) 定員 約100名(椅子席)  
**主催団体** 呑川をきれいにする会

構成 呑川の会 代表 大坪庄吾  
東京マイコープ南部環境委員会 代表 城戸菜穂子

**協賛** NPO法人福祉コミュニティ大田  
おおたく環境探検隊

**基調講演** 呑川水質の現状 日本工学院 猪口眞美 学生課長(前環境科学科科長)

**パネルディスカッション**

コーディネーター 守屋由紀枝 環境カウンセラー(環境省認定)

パネリスト 地域住民の声 宮田孝子  
呑川の歴史からみた呑川の水質 大坪庄吾  
下水道局の対応 下水道局計画調整部計画課基本計画主査 水沼敦彦  
南部管理事務所管路施設課長 池田匡隆  
大田区の対応大田区南地域行政センターまちなみ整備課 宮崎聡  
まちづくり推進部環境保全課 稲葉明子  
研究者として 猪口眞美

会場との自由討議

### 当面の呑川の会 スケジュール

5月10日(木)10時 生活センターグループ活動室 第1回呑川シンポジウム 最終打合せ  
5月19日(土)13時30分 生活センター講座室 第1回呑川シンポジウム開催  
6月1日(金) 定例会 蒲田小学校 6月30日(土) 総会 蒲田小学校

## 依頼による講師派遣

5月16日(水) あおば生活学校 呑川ウォーキング案内  
5月24日(木) 久原小学校総合学習 呑川ウォーキング前半  
5月30日(水) 久原小学校総合学習 呑川ウォーキング後半

## 報告 第6回 エコフェスタ ワンダーランド in 大森第一小学校に展示参加 呑川の会は【呑川の水質はいま】のテーマで展示。

2月18日(日)大森第一小学校で行われたエコフェスタワンダーランドに今年も呑川の会として参加しました。会場は3階3年1組教室で、教室内壁面に「呑川の水質はいま」というテーマで展示をしました。呑川の歴史から見た呑川の水質の変化と現状、水質改善への見通しなど、写真や資料を使ってパネルを作成、5月に行う「呑川シンポジウム」の宣伝も兼ねての展示にしました。

湧水を水源とした呑川が、都市化にともなって水害の多い呑川になり、水害防止の工事で現在の呑川ができたこと。流域の下水道化がすすんだものの、越流水による汚水の流入が現在も大きな課題になっていることを訴えました。子どもにはややむずかしい展示ではありましたが、熱心に展示を見てくださった方もいました。

会場の教室のテレビを使って工藤会員が作成した「呑川讃歌 春、桜と鳥と魚」のDVDを流し、呑川の美しい映像と対比して展示が構成できたのはよかったと思います。

今回は3の2教室他で 東京マイコープ南部環境委員会 環境保全(株)による呑川水質問題の展示があり、それぞれの団体が呑川の水質問題にとりくんだことを報告していました。

なお、この展示は、呑川シンポジウムするとき、会場前の廊下に再展示する予定です。  
(大坪庄吾)



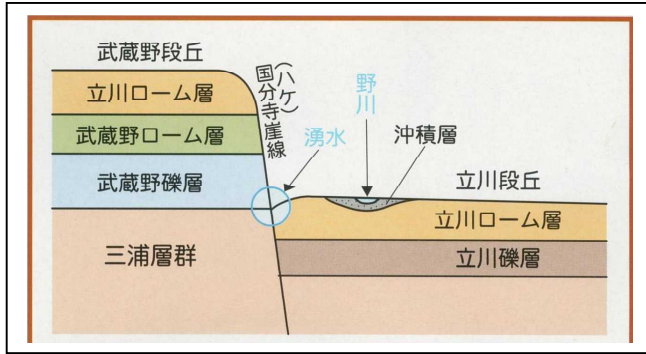
展示作業に集まったメンバーと展示の一部

## 野川中流ウォーキング

白石 琇朗

暖冬で桜の開花が早いと思い予定を1週間早め、3月24日(土)に調布駅よりバスに乗り武蔵野公園で下車しました。残念ながら染井吉野桜にはまだ早く、北門から野川公園に入り野川沿いの大島桜の下で集合写真を撮りました。自然観察センターに入り、野川と国分寺崖線の見聞を広めることができました。下図は国分寺崖線の湧水のしくみをしめしています。このしくみで各所から出る湧水だけで野川ゆたかな流れが保たれているのです。続いて自然観察園に入り、木道を歩き、ハケから湧き出る湧水の池廻の途中、カタクリ等の花や野鳥を観察しました。わき水広場で多い水量が野川に流れ込むのをうら

やましく見ることができました。



### 湧水はこうしてできる

### 参加者一同

売店広場でビールを飲みながら昼食を和やかに摂りました。

午後は、かしのき橋から2ヶ所の湧水をまたぎました。三鷹市の湿生花園でカラーの白い群落と箕輪家のワサビ田の緑が映える木道を歩き、崖線に保存された出山横穴墓を見学して湧水の里山を味わいました。

飛橋を渡ると茅葺き屋根の古い民家があり、そこに保存された木製の峰岸家の歯車水車に感動しました。水車は三鷹市の文化財として保存されたものです。

ここから野川沿いに川面の直ぐ脇の緑土の川岸(右岸)を、普段はテニスコートの大沢調整池を通り、魚・鳥・桜を見ながら歩いていると、カワセミが川面を飛んで来ました。カワセミをこんなに間近に見られたのは大収穫です。工事の御塔坂橋から上の歩道を歩き、中央自動車道を過ぎたとき、左岸にカワセミの巣を発見しました。ここでも撮影騒ぎでたいへんでした。深大寺からの逆川・佐須用水の流入を左岸に見ながら甲州街道を左折して京王線・柴崎駅で解散しました。

## 呑川講座の開催

## 雪谷文化センターで

久しぶりに呑川講座を開きました。

日にちは3月17日(土)、場所は雪谷文化センター、内容は次の通りです。

呑川の流れ                      呑川樹木散策                      白石琇朗、可児昭雄

呑川の生きものたち                      高橋光夫

呑川の未来の姿                      福井 甫

いずれも写真のスライドショーで説明し、分かりやすいように努めました。

白石さんと可児さんは呑川沿いの200種以上におよぶ樹木を中心に呑川の流れを紹介し、呑川も捨てたものでない印象が強く残ったと思います。

高橋さんは呑川で見られる野草から魚、野鳥など細かいところまで丁寧にみつめている報告で、高橋さんの一つ一つの自然に対する愛情が充分に感じられるものでした。

今のガーデニングブームはそれぞれの花が妍をきそって「私をみて、私をみて」と言っているようであり、それはそれで、きれいなのですが、高橋さんの話しは人知れず呑川の道端に咲く野草のきれいさ、けなげさを気付かせてくれたと思います。

私は呑川について全く知らない人を対象に呑川の課題をわかりやすく伝えたいと思いましたが、どこまで通じたでしょうか? 講座の参加者は23名。ただし会員以外の参加は9名。講座の前の3月1日から16日まで同じ雪谷文化センターで「呑川の樹木写真展」(内容は去年のエコフェスタ展示に同じ)を開き、そこそこ見てくれていた人がいたので20名ぐらいいは参加してくれるかなと思っていました

が残念です。講師が呑川の会員だけではやはり限界があるのでしょうか。

(福井 甫 記)



雪谷文化センター ひろばの会  
代表 三橋 久子さんの挨拶

## クリアウォーターについて散布結果報告 2件

前号(第44号)で海底、湖底、川底等のヘドロ改善材としてのクリアウォーターに触れましたが、クリアウォーターに関する資料を2種入手しましたので紹介したい。

大田区環境保全課作成「呑川底質改善剤散布による底質浄化効果について(報告)」

(以下区報という)

静岡県環境森林部作成「浜名湖浄化技術発掘事業報告書」(以下浜名湖報告書という)

まず浜名湖報告書によるとクリアウォーターは宇部興産株のグループの宇部マテリアルズ株が海水中のマグネシウムを石灰のカルシウムと置換し、水酸化マグネシウムとして生成された弱アルカリ性の環境改善材で、有機物が堆積し酸性化した底層にクリアウォーターを散布することにより底質のPHを8~9に維持し、好気性細菌の増殖を助け、底層の有機物・ヘドロを分解し、硫酸塩還元細菌の増殖を抑制することにより硫化水素の発生も抑制するという。実際長崎県の2箇所の養殖場では全硫化物の濃度が5年間でほぼ半減するなどの成果が出ているようだ。

### 1. 浜名湖での散布実験結果

浜名湖では湖奥部分を中心に底層部での貧酸素水塊の出現や植物プランクトンの増殖などにより悪化した水質の浄化発掘事業を全国から募集した。その結果49件の応募があり、そのうちの15件を実際浜名湖で2年間実験した。その一つにクリアウォーターを用いる案が採用され、その実験結果をまとめたのが浜名湖報告書である。

実験は浜名湖の最奥部の猪鼻湖と松見ヶ浦の2箇所にそれぞれ25m四方の散布区と比較のため同じ広さの無散布区を設けデータを採取した。しかし浜名湖の実験では2年間と実験期間が短かったため、明確な改善効果が現れなかったこと、浜名湖に流入する水の浄化対策を先行させないといったことであること、浜名湖全体で実施するには対象面積が広すぎて莫大なコストがかかること等により浜名湖での実施については実験の評価はA,B,Cの3段階で評価するとAはおらず、B,Cとするものが半々であった。ちなみに浜名湖ではかき殻を利用した技術、と市民と協働で火山礫を活用した技術が高い評価を受けている

### 2. 呑川での散布結果

呑川については昨年 7 月大田区南行政センターが環境保全に委託して双流橋付近でクリアウォーターを散布している。その結果が区報告書にまとめられた。その概要は次の通り

散布状況 7月25日・26日に大平橋から山野橋の約110m区間(約1000m<sup>2</sup>)に1m<sup>2</sup>当たり1kg、合計1000kgの散布

調査時期 散布前の7月14日、24日と散布後の7月31日、8月8日、18日および9月7日

場所 大平橋、山野橋 御成橋で 上流の双流橋は底泥がほとんどなく調査不可。

項目 改善剤粒の存在の有無、pH、硫化物、CODおよび強熱減量

調査結果

改善剤粒の確認 大平橋と山野橋の中間点では 8月18日まで 山野橋では8月8日まで確認。御成橋では調査期間に確認されていない。

pH 散布前はどこも 7.0 前後であったものが散布後は一旦数値は上がるが、徐々に下がり、山野橋では8月18日にすでに6.8となり、報告書では「アルカリ剤散布の効果は長く続かないように考えられる」としている。しかし3週間後の9月7日に大平橋ではpHは7.7と依然7.0以上をキープしている。

硫化物 硫化物は散布前の7月24日より数値は高くなり、その後もあまり変化しないことから「改善材の効果は見られない」としている。

CODおよび強熱減量 COD、強熱減量とも同じ時点で大平橋と山野橋で逆の方向に数値が示していてよく分からない。

まとめとして「散布後すぐ底質のpHは上昇し、しばらくアルカリ性となることが確認できた。しかし、大雨・下水越流・潮流等多くの要因がある上、総合的に汚濁の要因となる値が下がったと言えないため、呑川での底質改善剤『クリアウォーター』の効果は確認できなかった」としている。

実際 1回の散布で全てがわかるのは無理だろう。少なくともpHは一時的にせよ下がっており、また散布時には悪臭は減ったとも聞く。散布費用も多額ではない(浜名湖報告書によればクリアウォーターは1kg350円。1000kgで35万円である。それに散布費用が必要)。従って当面は継続して散布し、その効果を測定してみることは有意義だと思い、今年も散布予算は計上しているようである。

ただ測定項目は住民が一番被害を受けているのは悪臭なのだから、まず悪臭を客観的に測定できる体制を整備することが望ましい。また生きものへの影響も注視する必要があるのかもしれない。

一方越流水の被害は上流地区、中流地区での越流の結果が下流で発生する構造になっている。従って下流での測定体制・底質改善剤の散布費用等も下水道局等全体で負担するのが当然ではないかと思う。

以上

(福井 甫 記)

## 高層マンションのディスポーザ設置に思うこと

折戸 清

最近川崎市では大工場が移転した跡地に高層マンションが建設される例が多くなった。私が住むマンション近くの工場跡地にも20階建てのマンションが建設され、その売り出し広告がポストに入った。それを見ると「生ゴミはディスポーザで処理できるので便利です」というようなことが書いてある。これまでの私の常識では下水道に対する汚濁負荷が大きいディスポーザは自粛しているとばかり思っていたので、先日川崎市役所に問い合わせしてみた。市役所の話では確かにディスポーザの下水道に対する汚濁負荷は大きいので、市では要項を作成して業者に対し行政指導しているとのことであった。すなわち高層マンションでディスポーザを設置する場合は、マンション敷地内にディスポーザと一体になった浄化処理施設を設置させ、そこで汚濁負荷を通常の生活排水並みにまで下げてから下水道に流し

込ませているのだそうだ。

生ゴミも屎尿と同様で家庭内で保留するのは不衛生だから下水道ですぐに処理した方が良いとする方向での研究も進められているようである。しかし少なくとも合流式下水道地域で大雨時に大量の下水が河川に越流する現状では、ディスポーザ問題がすべて解決したと言える段階ではないだろう。

下水道が普及する以前には休日などに近所の人が集まって近くの排水溝の掃除をした。排水溝の汚れ具合が目によく見えるのでお互いに排水溝を汚さないように注意し合ったものだ。最近では水洗トイレの普及で汚れたものはすぐ目の前から水で消し去ってしまうという文化が行き渡ったので、下水道の汚れ具合がどうなっているのかよく分からない。いろんなゴミを混ぜ合わせて莫大なコストを必要とする下水道で後始末するという考えでなく、ゴミはなるべく発生源で分別処理するという方向での研究もしてほしいと思う。

大資本の行き過ぎた開発もさることながら、私達の行き過ぎた利便性追及の生活スタイルも考え直したいと思う。 (H19.2.17)

以上  
追記

参考までに都は下水道条例施行規程を改正(平成17年5月施行)し、ディスポーザを設置する場合には処理装置付きディスポーザでなければならないことし、単体のディスポーザの設置は禁止されたそうである。

## 「おとなりさん」が【旧呑川と新呑川】の特集記事掲載

城南地域を対象に発行しているタウン誌「おとなりさん」の2007年3月号で、【旧呑川と新呑川】の特集記事が載った。18頁から31頁までを使ってかなりよく調べた記事になっている。次のような見出しと副題で構成されている。

[生活の中の旧呑川 昔は水を飲み、泳ぎ、海苔と切り離せなかった。]

呑川の水を実際に飲んだ方からの聞き取りも紹介し、生活の水として活用していたことを書いている。旧橋の名も紹介。

[洪水と新呑川の開削 新しい川を掘り、水害対策] 新呑川開削の事情が解説されている。

洪水の被害から生活を守るために開削された新呑川が完成したが、洪水の回数は「一応減少した」とまとめ、洪水対策が戦後の改修に持ち越されたことを示唆している。

[新・旧呑川と海苔業者 家の玄関と同じくらい、重要なものだった]

共同船揚げ場設置を求めた資料が紹介されている。

[現在の呑川 雨が降ると呑川はなぜ臭うのか]

現在の問題にふれているが、いま少し突っ込みが足りないと思った。

呑川の歴史を知る上でたいへん役に立つ。この記事をもとめるさいに大坪会員がインタビューを受けて協力した。

### 編集後記

呑川の会活動も、昨年から今年かけてぐっと広がった。対外的な活動を会員諸子がすすんで引受け、講師や案内役で活躍している。呑川だけにとどまらず、都内の川から学ぶことはたくさんあった。昨年と今年続けた野川散策もその活動もそのひとつだった。豊かな自然にふれ、美しい川に感動するところから、呑川への願いもふくらんでくると思う。 大坪